

2012/08/19

「渦の研究会」の abstract

講演題名；

〈災害時経済〉Disasters-Time Economy のもとでの別様な経済秩序の生成

— 〈ミクロ出現〉からの新たな経済秩序の生成と既存経済秩序との相互浸透による別様な経済秩序形成
似田貝 香門(東京大学名誉教授)

講演内容の簡単なアブストラクト；

1. 渦動論の社会現象への適用の基本的視座

〈渦〉とは、規則と不規則、近さと遠さ、求心と遠心、巻き込みと排除、秩序と解体などの相反する要素および動態的特徴を束ねる表象といえる。

人文・社会系では、時間とともに転変する心や人間存在、集団、社会に起こる「揺り動かし」や「変化」を、必ずしも十分には捉えようとはしてこなかった。それは、変動論と構造論が二元的にとらえられ、それを全体理論として捉えることが困難であったからである。

しかし、ひとの知的活動や社会形態の生起・展開・消滅を動態として記述し分析することは、自然科学が渦の構造や運動、働きを研究しようとしているのと同じ問題設定であり、ともにテーマとすべきであろう。

社会学にとって〈渦〉そのものは研究の対象でない。

〈渦〉という現象を、社会現象（とりわけ社会運動）の複雑な様相を把握する metaphor として捉え、この metaphor の作用を応用する。

〈渦〉の metaphor 作用をどのように応用するかと言えば、〈社会事象の特異な動きを、ミクロからマクロにわたる、変化・変動と社会構造変化を一つの過程的運動として了解〉する、ための手段としての概念（＝索出的概念）として使用し、これによって私たちの当該の**研究対象の記録、表現、記述を可能にすることができると、思うからである。**

〈渦〉という一種の様相概念を用いることで、いわば「点」や「線」に還元することが不可能な、時間とともに変化・変転・変移・転位する特異性、新たな出来事・事柄の生起、既存の出来事・概念の展開、周辺や外部の異質な要素を「寄せ集め」、それら異なる位相を同一の運動へと包摂し、動態的・複層的、多系的な組織化によって「統合」された多様性、多価性の世界を創造する、これらの「形」と「力」の実相を把握する可能性が模索できる、というのが基本的な視座である。

2. 社会運動の〈中枢性〉形成と「実践的閉域」（〈中間的領域〉）の実践の場

先に触れたように、〈渦〉を metaphor として考えると、社会学の社会運動、社会変動研究は新たな視点を得ることができる。

ミクロに生起した出来事が、「潜勢的主体」によってテーマ化され、そのテーマ力が社会的力を持つに至ると（主体によるテーマ野定式化と運動の組織化）、他の課題がこのテーマや運動組織体へ巻き込まれていく様相を産み出す。

それは多様なテーマや運動組織が、緊張と対立というダイナミズムを産み出しながら、**集積し一つの「実践的閉域」、すなわち、形（テーマと組織）と力（運動力）を生み出す様相運動となる。**

つまり、「渦動論」を社会領域に援用すると、以下のような方法＝作業仮説を形成できる。運動の生起という自生的なミクロの局面から、運動の組織化によって、「**実践的閉域**」の**実践場たる〈中間的領域〉の構築**がなされる。運動の力が強ければ、社会の諸実践がテーマをめぐる運動の中枢に寄せ集められ、内容として累積される。

こうして、中枢へ向かう諸実践の内容は多様性を帯び、それが故に相互に排除、包摂、依存、並置、重層しあうという矛盾と差異を孕みながら、特異な「**動的多様系**」の運動性を展開する。

こうした諸実践が中枢へ向かい、そこで展開される特異な「**動的多様系**」の運動性こそ、多様性の産出を可能にする創造の源であると考えられる。

図1. 社会の生産

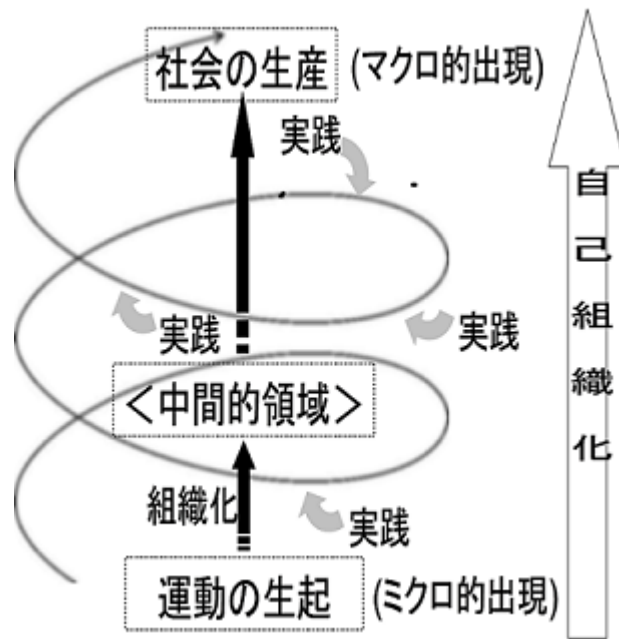
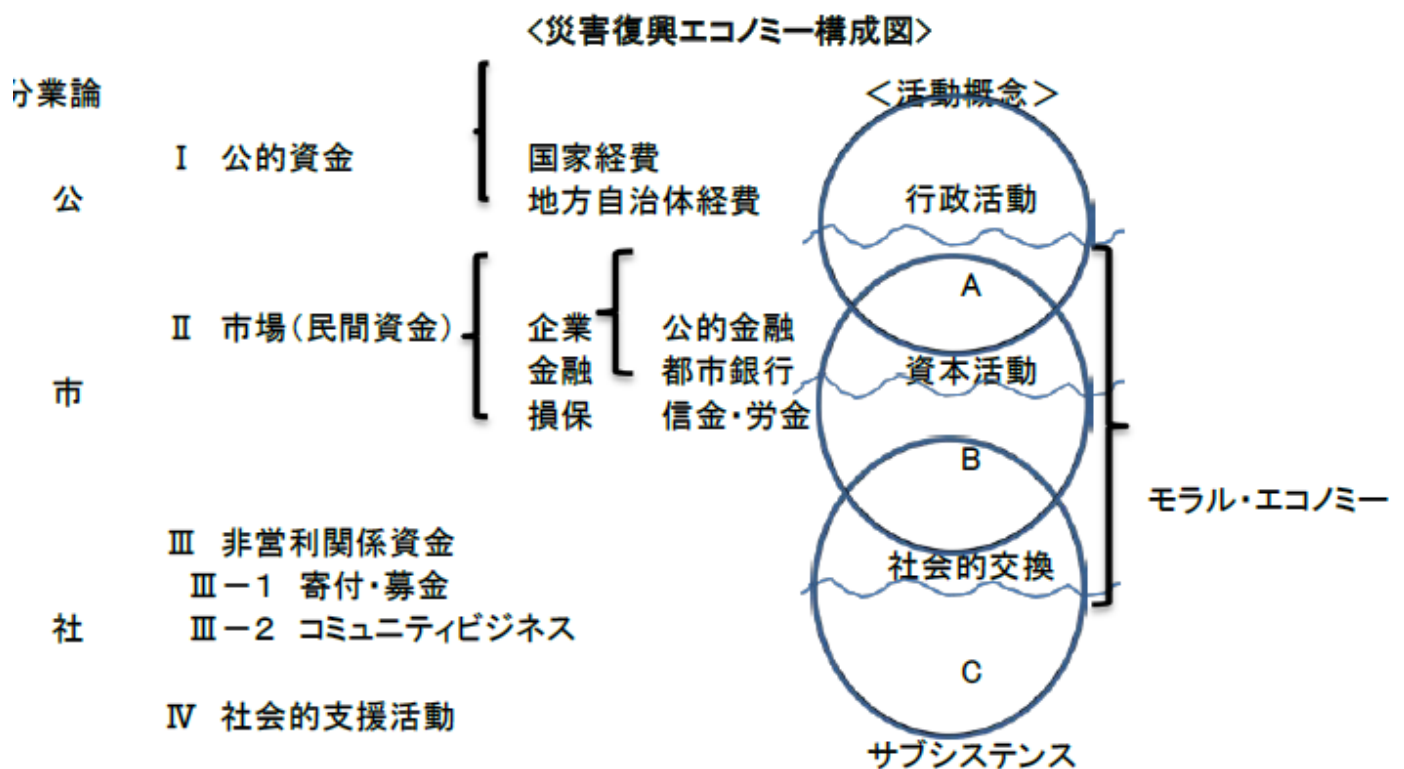


図2. <災害時経済> Disasters-Time Economy のもとでの複数の経済秩序構成



3. 阪神・淡路大震災から東日本大震災で<災害時経済> Disasters-Time Economy での特異な「動的多様系」の運動性(経験的分析) 詳細略

災害時における復旧・復興過程を分析するための包括概念として、「戦時経済 War-Time Economy」からの転移させた、<災害時経済 Disasters-Time Economy> なる概念を措定し、

- 1) 災害時における復旧・復興過程においては、公的領域、市場領域、社会的領域に複数経済秩序が構成され、
- 2) 〈災害時経済〉Disasters-Time Economy のもとで、新たな行為として、被災者へ自立支援の方法の一つとして復興グッズ被災地グッズが〈ミクロ出現〉し、それが〈中間的領域〉に、不安定ながら、〈ボランティア経済（圏）〉が生成してゆく実践のプロセスを明らかにし、
- 3) その上で、〈災害時経済〉を構成する複数の経済秩序に〈モラル・エコノミーmorals economy〉という経済行為の規範体系が出現する事を示し、そこから、市民社会における連帯の新たな行為規範の〈マクロ出現〉を論証する。

図 3. 〈災害時経済〉Disasters-Time Economy のもとの
復旧・復興資金の出所

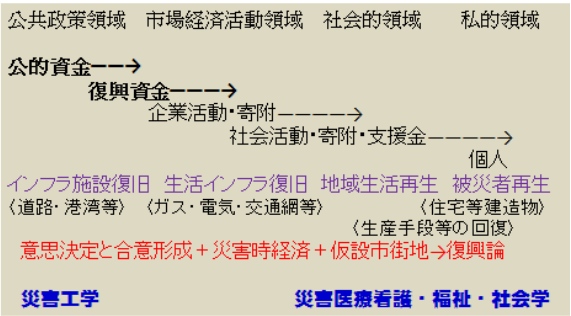
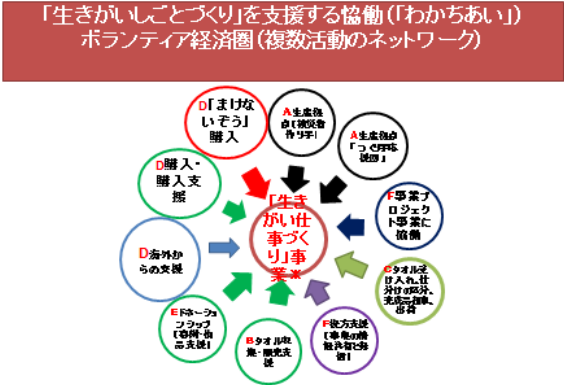


図 4. ボランティア経済圏



4. 社会学の領域からの暫定的まとめ

〈渦〉を、ミクロ次元に、次々と現出する新たな社会現象（出来事）がテーマとして中心軸、中枢性を形成し、したがって、〈形と力〉を持つにいたり（〈中間的領域〉）、それが次第に他の要素を加え、削除されながら、あるいは拡大、縮小されながら、運動量を増加させ、マクロ次元の制度、構造の一部に、〈組み込み agencement〉、そこから、本格的な構造変動（新たな構造形成）を起こす。

社会学的な「渦動論」は、ミクロ局面からマクロに向かって、多様性を社会に組み込むその社会過程途上に、動態的〈位階層の秩序 hierarchy〉という自己組織化の動態的特異性を解明する可能性として、今後なお究明したい。